幼児画創造教育の意義と色彩分析について

（その１）

大　月　賢　志

緒　　言

新らしい幼児美術教育（絵画製作・図画工作）が広い視野にたって論ぜられ，展開されかけている71年代絵画製作の分野が，重要性を認められ，確かな理論や意義，効果的な指導法の確率が強く要望されている。幼児の絵画製作を通じての造形活動は，生活体験を通じて豊かな情操を培い，たくましい健康的な創造力の育成を目標とし，戦前の画一的美術教育を改め，戦後の美術教育は，一大飛躍を遂げた。特に1952～1960年の間に起った，個性尊重の創造美術教育の流れが，今日の幼稚園教育指導要領編（絵画製作編）の改革をもたらし，その理論と実践がおこなわれているが，今一層これらの絵画製作教育上の諸問題を慎重，且つ丁寧に解明し，幼児の心理に即した研究をすることが目的である。筆者らは，民間美術教育運動の岡山県支部として創造美育協会（俗称，創美）のリーダーとして「子供の生来の創造力を伸ばし，外界の抑圧から解放し絵を見ないで描く絵を賞揚し，教師の役割として環境の整備を相談相手になることを」あげ子供に精神衛生をとなえ，活気と自信，意欲をとりもどし心理的見方をとり，新らしい理論をうちだそうとした。現在の保育者，教育者は，どんな絵が創造的であるのか，健康的とは何か，概念的な絵とはいかなるものを云うかなどの見方を次に述べよう。

1　創造教育の意義

絵画製作の大きな目標は「創造力を養う」ことに外ならない。幼児期は，特に想像，創造力の豊かな時期である。

創造的活動とは何であるか。美的事象の決定は，認識ではなく感情であるという美学理論から考えても，創造性のある幼児の作品というものは，数理のように明確なる回答の出るものではない。だから色々と論議されしばしばとり交わされているのであるし，又事実難しい仕事でもあり，幼児に創造性の必須なことは間違いない。では，一体創造的な作品とは，どんなものを云うのか。Fox Mead School. Scardal N.Y の Gertrude. M.Abbihl 教授の書いた Guiding Youg Artist に興味深い論説が述べられている。その言葉を借りれば，「作品を創る人の個人的感情の現われが，その製作品の中に滲み渡って，ある新鮮な感じを持つことが創造的なものと言える。創造的活動は，その個人にユニークな思想なり，感情なりを表現する手段でもある。だから一つの型に当てはめたり，既製標準で批判したり，訂正したりすることは許されない。その作品の価値は，創り出した入にこそ重要なる意義を含んでいるのであって創造すると言う，幾分冒険的活動に，子供は，精神集中と辛抱強さを続けて，それを彼等の楽しい遊戯気分に結びつけていくのである。

子供は皆んな，自分の創造した絵や作品のことを，よく，大人に話すが，大人がその創作活動を理解するか否かは，大人が子供の眼になって，子供の心理を深く理解してやることで子供と共にその絵や作品を楽しんでやるかどうかにかかっている。又，その経験の表現であるが故に，子供にとっては大きな価値がある。作品が大人の眼に写真でなくても子供が創意工夫し創

ったものであるが故に，その子供にとっては正に真実である。そうしたプロセスに大人の干渉がはいり込む場所があってはならない。子供にとって創造的のプロセスは空想的な考えの探険であり，経験や感情を告げようとする懸命な気持の再現である。」以上の論文で，創造的精神は躍っている〝リズムのある生物だ〟と言った，ヒューマンの言も想い出される。又，Viktor Lowenfeld も〝作品は子供にとって高度に教育的である。然し，仮にそれが子供自身の経験と関係がなく，自己表現でなくなれば，それは単に外界の再現に過ぎず，子供の成長を促進することは出来ない。子供が自由に経験したすべてのことについて考え，経験と夢を，又，経験と空想を，又，いろいろの経験と経験を結びつけ自己独特のものを表現することが重要で，つまり，子供が自由に題材を選ぶようにし，又，素材を自ら選ぶ自由を子供に与えると，その作品も自発的であり創造的である……〟と述べている。

これは現在の保育園，幼稚園に於ける絵画製作の領域の根本理念であって重要なる意義を含んでいる。

2　創造（幼児の良い絵と悪い絵）

即ち，創造的表現をさらに要約すれば次の様になる。

良い絵とは，概念的でないものを云い，創造性あふるる絵のことで，その子らしい絵で，心の現われたものを云う。この様な絵は全く自由に現された絵のことで，全く大人の干渉の加わっていないものを云う。

大人が自己の標準のみで（大人の審美眼で一つの美術絵画作品の立場だけから訂正，指導すること）幼児の絵を評価するならば，幼児は大人の気にいるように，こぎれいにまとまった作品を作る様になってしまう。よほど経験のある指導者であっても，つい，幼児の創造性を見おとして，悪い結果をまねくこともよくある。よく大人が「上手よ」とか「下手」とか断定しているがこれは良いことではない。そんな作品主義的な評価は創造力をつみとる結果ともなるので注意して欲しい。この場合指導者は，その幼児の発達環境から理解し，何故今日はこんな絵や作品が出来たのか，どこが良いか。どんな内容を含んでいるか，又，どの様に素材を構成しどの様な態度で創り出したか幼児として好ましい方向かどうか。その他，いろいろ内容を検討し，教育的，心理的見地から親切に，そして，生活意欲，作画意欲が高まる様，又，新鮮なる物に反応する力を育てるよう賞讃したり，言葉をかけてやるのがよい。

この創造的な作品（良い）のなかで，更に次の様に分けると，

(A)　良い作品とは＝見る者に幸福を与えるもの年令にふさわしく個性と自信のある，しかも伸々として，力強く幸福感が作品の内にただよっており，見ても感じの良いものを云う。これらは健康的な総ての要素を含んでいるもので，一口に云って，幼児らしく内容も豊富で充分なる経験も表われており，力動性に富み，抑圧も感じられず，伸々として新鮮で迫力もあり，経験や夢を作品の内に充分表現したものを云う。

(B)　良い作品であっても好ましくないものとは＝見る者が不快な感情をいだく様なもの。絵の場合は，火事になった家から「お母ちゃんと私が逃げている」見るからに一面黒に塗りつぶされたり攻撃的な筆触，不気味さのただよった内容などいろいろの気持が表現された絵であるが，一応創造的良い絵であって内容的に見て決して健康的な子供の姿とは感じられない。これら不快の因子は主として家庭その他から受ける抑圧，欲求の不満などによることが考えられる。それが，絵にもいろいろな形であらわれてくる。そこで良い絵を描かせるためには，子供が不快な気持になる原因を取り除いてやることが必要である。製作品の場合も同じ

原理によって見るべきと考えられる。

根本の原因を除かないで「もっと明るく，もっと力強く」など云うことはむだであり干渉になってしまう事もある。日頃注意していれば，悪い作品にすぐ気づくはずで早く不快の原因を取り除くことが大人の役目で，こうすれば作品も明るく楽しくなってゆくと思う。指導者やお母様方の中には，よく展覧会だのコンクールだのと，点取り主義に夢中になって，子供の真の姿を忘れている傾向をよく見受けるが，教育に必要な問題を含んでいるのはそんな作品ではなく，幼児が，指導者や親に見せたがらないもの，破ったり，こわしたり，すててしまった作品に多い。そんな作品でも，気をつけて，しわを伸ばし組立てて見てやって欲しい。幼児に作品を創らせる一番の目的はこんな所にある。「そういわれれば，あの時描いた絵は．きっと何かあった時だった。あの時作った作品は……」と気づかれることがあるのではないだろうか。

3　創　造（表情の意義）

次に，幼児画には表情に重要な意義がある。

私達が幼児画を見て表情のない絵が多いのに驚く。これは大人が幼児の絵を上手に美しく描かそうとして，大人の描画技術の概念を幼児に指導（おしつけ）する為，子供のせっかく素直に成長している感覚がゆがめられて育ったもので無表情，無感覚な死んだ絵となったものである。それでは　絵画表情とは，いかなることを云うのか。

幼児は健康体である限り，表情をする。絵画で心の表情をさすことこそ，幼児の真の絵画である。泣きたい時には泣きたい顔になる。心に嬉しいことがあると知らず表情もほころび，とろけるような瞳になる。幼児の表情には全く偽りというものが存在しない様に，その絵にも嘘というがのがない。この幼い神に誤魔化しを教えるものは実に大人なのである。

大人の抑圧から解放し，心の自由な表情を許してやればどんな子供も描くことを悦ぶようになる筈である。大人の作った描画技術で縛っていては，自由な表情を創りだす事さえ出来ないばかりか心が萎縮してしまう。描くことは，心を語り発語することだその発音にはさまざまな難しい規定を強いたとしたら，一言の発表も出来なくなり，仮に，出来たとしても，それは依存模倣となる。

そこで幼児画に必須な自由な表情とは，明るく楽しいことだけではない。心ゆくまで怒ることも自由な表情だし，気持の治まるまで泣くことも自由な権利だし，淋しい気持の時には淋しい孤独な色彩が出るのも，激しい怒りの後に攻撃的な筆触（線，色）が感じられるのも同様な子供の特権であり，こうした心のぶちまけ，心の感情の表現された作画を大人がいかに訂正し，指導しているか，そうすることは，これも一種の悪質な抑圧であると言いたい。

誤った家庭や教育指導は，そうでなくても抑圧の毎日に喘いでいる幼児にとって再起出来ない自暴を植えつけられ，それが内攻して悪質の地下攻撃と変っていくのである。恐ろしいことである。無意識ではあるが幼児は描くことによって，そうした諸種の抑圧を解放し，精神治療としての不純物を発散しつつ適応を図っているのであるから，充分描かして子供の心の表情をさせなければならない。それが幼児の重要なる教育である。幼児の真の良い絵は大人達には全く理解されていないことが多い。その為，出鱈目だとか無駄だ等罵声をさえ浴びせかけて，ことさら子供を，概念化させたり，取り返しのつかない萎縮児にさせたり，無気力で無表情な人間化を図っている結果となっている。大人には解らなくても描いている幼児自身には興味と意志の方向がある。その解らないものを描いている時こそ，子供の態度や表情を見ても，それが，如何に真剣であり，如何に喜悦であるかが，よく頷ける。「大人の命令した以外の子供の

している事は，一つとして不幸な事は無い」と言ったドイツの心理学者の言葉が思い出される。又「絵は子供の心を覗く眼鏡だ」と云ったコクレル教授の名句を思い出す。ローマの聖者，ランドーネ博士が「絵は子供の経験の魂である」とも云っている。

4　概念的な作品の意義

一口に云って子供らしさのない絵のことで，絵の中に全くその子供の生活や経験，感情（魂，心）の含まれていないものを云う。これは製作品についても同じである。子供の年令にふさわしくない作品。形式的で大人のまねのような作品をいう。こう云う作品を創る原因として，大人の干渉や塗り絵などにより，型にはまったり，子供の生活感情が生き生きと表現されなくなることによるものである。幼稚園（4・5才～5才）に行くようになると女児は人形，チューリップと云う消極的で装飾的な絵，男児はロケット，電車それも人の乗っていない自動車と云うように，感情的固定が目立ち限られてくる。象徴期から前図式（2才半～4才）には，人間を紙いっぱいにたくましく描いていた子供が，何時も同じ人形を繰り返すようになってしまう。この様な子供に「お母さんを描こう」と云っても形式的な人形になってしまう。同じ絵がたえず繰返されて，成長のあとも見られず，自由な自己の作品が創れない概念的な作品に終始してしまった子供には，まずその原因を研究する事が重要。その原因が姉，祖母，近隣，母，園など環境に起因する場合には，その人達に大人の干渉は悪いという事をよく理解してもらうこと。そしてもう一度子供から自信をとりもどすように励ましてやるのがよい。概念的な絵の中にもどこか子供らしさがにじみ出ている。それを見つけ出して賞讃することが大切である。

幼児は常に新しい事物を発見し，冒険してかちとろうとしている時期だけに，大人の干渉や誤った評価は，必らず子供の前進する力，創造する芽をつみとる結果ともなる。そして子供自身が作品主義になってしまう。前進する態度が創造的であり，固定した気持が概念的である。子供は何時も励ましによって，新らしい冒険をこころみ，遂にそれに成功するわけである。

5　幼児の絵とパーソナリティの関係について

幼児は，外部感覚器官を通じて生ずる感覚として，皮膚感覚，味覚，視覚，聴覚は乳児期は機能が一通り整い，幼児期に著しく発達を示すとされている。そこで色彩に関係ある性質や発達について考えると，生後1か月で明暗反応は生ずるが，色彩に対する反応でははっきりした結果を得ていない。網膜の錐体が未発達であるので新生児には，まだ物の形や色彩の知覚はない。乳児は，3ケ月頃で灰色と他の色との弁別することができ，3ケ月以降になれば色の色別もやゝ可能となる。6ケ月以降色調のその知覚は，はっきりする。クラス，ゴルスキーの実験では，1才の終りまでに赤，黄，緑の色別を教えることが可能であるといわれ，2才半頃から4才半の象徴期から図式前期へかけて未分化であるが色彩に対する発達は，著しく絵画表現の場合の色彩の知覚は，感情（精神）との関連で必ずしも正確な色調で描かれるとはいえない5・6才頃になれば感情と視覚による両者の表現が行われるようになり，生活経験や生活力の旺盛な幼児は，色彩を豊富に使い独特の嗜好色を使って自己表現をする。

大人が幼児の造形表現の評価に於て，色彩の意味の解釈に困惑することが多い。例えば5才の幼児が描く赤い犬，黒い犬，黄色な犬を表現した場合一般的評価は，この間違った色彩を訂正指導の必要から，大人の感覚をもって評価するがこの三様な犬は，おのづと重要な意味を含んでいるものである。

これら心理的特性と色彩との相関関係について，その結びつきを筆者達の美育グループにおいて，色彩の心理的，生理的な実証的研究を長年月にわたり実施，未開拓とされている絵画療法の問題その他幼児，児童の指導の手掛りをすべて，これら診断的役割の一端を述べることにする。

次に研究対象地区及び人員，津山市周辺幼稚園及び保育所ほか，550名（延2,500名）岡山市周辺幼稚園及び保育園ほか，600名（延2.000名），倉敷市周辺幼稚園及び保育園ほか，450名，（延1,500名），赤磐，和気地区幼稚園及び保育園ほか，150名，（延1,600名）その他地区，幼児クラブほか120名（延500名）

。期間は昭和38年10月～45年10月頃の7年間，園又は家庭調査，又は継続研究などを実施その間絵を収集，行動観察と結びつけ，特殊事例ととりくむ，対象年令2才～6才まで。

6　分析結果及び考察

(1)　色，線，形の分析と意義

幼児は，色，線，形を使って絵を構成する。これら行動は，素質，成長するにつれて経験によって，新らしい習慣と欲求を基本とする感情的，意思的特性の総合されたものであった。その総合行動の一つ，一つが個人と個性という形であらわされてくる結果となった。幼児は，色，線，形を併行的に経験する。そして運動感覚の活動体の喜びを色や線に表現し始めるが，幼児の絵は，なまなましい生活の記録であって，パーソナリティが絵と個性の関係が密着しているわけであるので，逆にそれら要因を分析し絵を見れば幼児の心を知ることができ，指導に重要な手がかりとなる。

男児は主として線描きが多く女児は，色を多く使う傾向がある。女児は色を克明に塗り家庭中心の絵をこのみ，静的で装飾風な感情を発露する。男児は動的な物語りや事件の変化が多い行動的な場面をキャッチし，特に乗物，ゼット機，最近格好よさで脚光を浴びていて人気のあるテレビ漫画などの攻撃的闘争場面を表現するが，大人は，このような絵を乱暴だ，教育的でないなど云ってけなす。又美しく塗った女児の絵を賞讃する傾向がある。このように多様化した現在こそ創造の本質が重要となる。干渉は，躍動的な絵，生命のある生活する絵を停止さし，同時に心の歩みをとめることにもなろう。

アメリカのアルシューラーとハトウイックの分析も描画行動理論から生れた分析の一つで，貴重なる資料であり，筆者達の研究も種々な形で，事例分析を試みている。

幼児の創造的な絵は，もはや世界の共通語となっており，研究している美術研究者も見うけられる。

(2)　色彩を象徴的に使用した場合

(A)　暖色の意義（赤，黄などを強調）

幼児は，成長の過程で形や線よりも主として色に興味をもつ結果となった。

暖かい感情をもち自由に行動する子供であって，自己主張も激しく他人に頼る気もある。（この年令の子供の通有性）。遊びの時などは，他人と仲良く又同情的傾向にあった。

(B)　冷色の意義（黒，青の強調）

冷色を好む子供は，攻撃的である。その反面孤独で独立的で，知的な興味がある。冷色を好む子供の大きな特徴は，感情を自己抑制する傾向が見られた。

冷色とは「青，黒，褐色」を云うが，この色を好む幼児たちは，批判的，独断的な性格特徴

をもっているものであるから，園において先生の事など余り気にせず，強い意志で行動し一人遊びが多い。何かのきっかけで多くの友人と遊んでも，その中で我がままな性質を発揮することがよく見られた。

(3) 赤色の意義（自由，幸福）

女児に多く顕著な性格特性は認められなかった。自分が思ったように自由に行動し，抑圧を気にかけないタイプで，自然に適応し感じたままに反応する傾向がある。だから我が儘な形で現われることも多い。例えば友人と仲良く楽しく遊んだ時とか，大人と無邪気に遊んだ時，又は幸福で明るい気分の時，自然に赤を豊富に使って自分の感情を表現する。この赤は，特に愛情に関係ある象徴的な赤と云える。

赤を使用する場合，その筆使いによって二種の相反した結果が生れた。

赤を鈍重な左右の直線的筆使い＝敵意，攻撃と自己主張を現わす時，

赤の軽い丸味のマッスの筆使いで塗った場合＝楽しい愛情に満ちたときなど，とにかく赤は，攻撃であろうと，愛情であっても，精神の興奮状態を赤と云う色で示すようである。

(4) 青色の意義

無口で友達も少ないし，子供の集団を一方から眺めているタイプの子に多い。又或る種の抑圧も感じられる。青にも色々な場合があるが，不安の青，周囲に適応した青とか，事例的に見て紫色と青で医者から帰っての苦痛や不安を現わしたこともある。又自分の下に弟や妹が生れると，よく青と黄を使用するようにもなる。青が黄色の上に塗られることは!!　もっと大きくなりたい!!　と云う欲望であるし　もっと赤ちゃんでいたい!!　という欲望の時青が先に塗られて，その上に黄色がかけられる。これはアルシュラの研究とほぼ同一視されてよかろう。青は清潔と結びつくようである。

褐色とかオレンジがかった褐色を使用した場合は，もっとやんちゃがしたい時使い，褐色と青を重ねて使用したい時は，汚れていたいという欲望と清潔を強いられたりした感情が一緒になった時，この二つを並べて不潔な方は，筆の穂で叩いて描く事がある。

青は色々異なった使い方をする。4才のS君は，稍々緊強したストロークで集中したマッスを描いた。園では，服従的態度を激しく示す子で，抑制された不安としての青を使用した。

青をマッスでなく線や形で使う幼児は，青色で構成的な絵をよく描いた。これらの絵は，前者の「抑制された青」に比べると全く対象的で，デリケートの形をもっている絵ばかりで，自分の絵に題をつけたり，説明をつけたりした。性質は，明るく素直でまわりの環境に順応性を多くもっているようであった。「昇華された青」「適応性ある行動を示した青」ともいう。

(5) 黄色を強調した幼児

黄色は幸福な気分や経験と結びつく。他に頼る子供又は，気分で行動する子供とか，他の子供と仲が良いとか，人から好かれる子供などは，黄色を好むようだが黄色は，概して幼児的な色彩といえよう。

青より黄色を多く使う子は，甘えん坊が多いし大人に，絶えず関心を持ってもらいたい子供である。然し多くの場合色は，他の色と並べるか，重ねるものであるが，黄色だけ使用した場合は，幼児として幸福な時，園で何時も先生に甘えているような場合5才N君は「お母さん」という絵を描いた。黄色は，友達と仲良く，気分的な行動をとる。（普通幼児特有の性格を濃厚にもっている）黄色は，父の愛情を求める色，

(6) 黒を強調した幼児

黒色を多く使う子供の絵を集めて見た結果，幼児の教育に対して誤った積極性を示す母，又母から強く叱られた実証が得られた。この場合黒を継続的に使用する。又家庭も不愉快な雰囲気がただよっている。暗黒は，母のヒステリーに対する恐怖，黒を画面一杯に塗りつぶす場合，父親の不幸を物語っている。黒で輪郭をとる場合母のしつけの厳しさを意味している。恐怖，抑圧，不安定感の場合によく使用される。家族の中で圧迫を受けている者があると黒を使う。これは恐怖，不安から受ける圧迫萎縮を意味しているが，この抑圧が形を変えて大変従順に見る事もある。

(7) 緑色を強調した幼児

緑色を好んで使う幼児は，青を好んで使った幼児より余り感情的でなく，おとなしく又目立たないので先生や他の幼児達から，見落されがちのようである。緑色は，一般的にいって情緒性の欠けた又自制的な幼児達によって使用されるようである。

緑色使用について作品を集計，事例分析の結果，①虚弱な幼児，②疲労後の描画に緑を多く使用，例えば園外保育のあとの疲労，又運動会や遠足のあと緑が多い，病後は紫を使用し緑色に変化することが認められた。又心痛にも使われる。3才から6才の保育園の幼児達は，眠くて我慢できない時，緑色を使い又午睡の前の絵は，約25%が緑色で絵を描いた。消極的な状態な時主として使用される。

(8) 褐色を強調しな幼児

褐色系の色彩は，教育上重要な意味を持っていることは，黄土色の説明においても黄色の説明において述べた。褐色は，黄土色と焦げ茶色の中間に位置する色でこの三色は，ほぼ同じ意味で関連をもっている。保育所の作品と家庭環境を調べた結果，父，不在というケースが多く又経済的に貧困，物的不満，愛情不足，空腹，などとなっている。

褐色＋黒＋緑＋白を使う子がいたが筆者の研究では，盗癖環境児を断定する多くの資料と事例が得られた。又盗児は，色のほか形にも異常な点が多々ある。最近の指導例で見ると，4才児に特に多く又冬から早春にかけて画面上で褐色を絵の具などで泥んこ状にして，塗たくっている幼児を見かけることが多い。別に心配いらない。

余り早くから大小便の躾をやかましく云われたり，清潔に育てられた子供によく現われる。又一般的特徴として，幼児の汚れたいという欲望を現わしている場合が多い。しかしこの色は，普通の幼児達には，見向きもされない色である。余り泥んこ遊びを禁止されたり，清潔教育を強制的に行なっている家庭の幼児達には，彼等の感情や興味のはけ口として褐色が使われている。

褐色と青と黒は!! 汚れる!! ことや 不潔物!! を表現する時使用される。アルシュウラーも褐色は余りにも，①早く大小便の躾を強いられた時，②泥んこや汚ない遊びを禁止された時，③清潔の母などにやかましく云われたいした時，子供がよく使用すると云いミス・ショウもローマの富豪の子供がよく使うと述べている。

(9) 紫色を強調した幼児

元気のない病人がよく使う。患者が好む色と云われている。又疾病箇所を紫色で示すこともある。痛い事のあった後にもよく使用される不幸な感情の現われである。紫を手がかりとして疾病傷害を知ることができると云われている。この色は，相当前から色々と問題にされてきたが，精神治療と結びつけた研究が行われているようである。例えば幼児，学童が他から何の干渉も受けず自由に，自分のイメージによって描いた絵では，本人，又は近親者の疾病障害を意

味するとまで云いきり，様々の事例分析を掲示している。これら研究の裏づけとし，ローエンフェルドも脳波の問題，精神生理学の問題などと結びつけて考えているようである。「年少者の神経症の診断の補助としての児童美術」と云う研究論文の中で「紫は意気銷沈した患者の選ぶ色である」と云っている。これらの研究から見て，紫色は何か不幸な時期の意気銷沈した感情や経験と関連があるようである。

遊び仲間のない不幸な男の子，エルンストパームスは「年少者の神経病の診断の補助としての児童美術（1941）という論文の中で「紫色は意気銷沈した患者の遊ぶ色である」といっている。

こんごの課題

幼児のパースナリティを論ずるのは，色だけではなく多くの危険性をはらんでいるし，軽率なる結論診断を下すべきではないが色彩の意義又は研究なくして，幼児の造形教育にあたることは，むしろ反省すべきではなかろうか。色彩を画面上のどこにどのようにおくかという色の置き方にも，意味がある。

①色をかさねて塗ったり，②離して塗ったり，③まぜて塗ったり，④混色，⑤色の乱雑な混色，⑥構造的な形，⑦円形の強調，⑧角のある絵，⑨断片的な絵，⑩ジグザグをした線の絵，⑪ストローク，⑫小さい絵，⑬大きい絵，⑭筆の運びの分析など総合的に分析する必要が生じてくる。これによって健康な幼児であるか，病的であるか，神経質であるか，憶病であるか，情緒性の強い子であるか，適応性の有無など判断することが可能である。第2報においては，これら事例を掲げ，幼児と色彩，線，形，内容などを深くほりさげて，幼児教育，創造的活動の解明に接したい。尚これらは，継続研究中であるので，中間報告にとどめることになった。尚子供は正常であるが環境がやや異常の場合の事例も多く逐次改善していきたいと思う。

（附　記）

この研究にあたっては，筆者が岡山県下幼稚園，保育園より貴重な幼児の資料の提供を頂き1964～1969の間，毎日新聞幼児教育欄を担当「幼児画紙上教室，幼児の絵をみつめよう」小林記者編集に800編（事例720）を執筆の貴重なる資料によりとりまとめができたことと本研究にあたり1964～1970の間資料の収集にご協力頂いた幼稚園，保育園，岡山市衛生部，保健婦（幼児クラブ担当）の方々，資料提供下さった父兄に対し，深く感謝の意を表すと共に，「幼児達の幸福を願って……」

参考文献

井手則雄，伊藤朝彦：新らしい絵の会編：幼児画の指導 1965
湯川尚文訳：アルシュウラー：色彩研究，黎明書房 1965
VIKTOR LOWENFELD : your Child and his Art : 1966
桑原実，林健造：幼児絵画製作教育法，東京書籍 1968
宮武辰夫　HELP：黎明書房 1960
辰見敏夫：幼児教育理論と実践：協同出版株式会社 1970